『120分 de 法華経！』　vol.22　Jan.2026

── Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

『妙法蓮華経 如来寿量品第十六　〈後半〉』（本門・正宗分）

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』　（法師品　二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は　此れを曉了すること能わじ』　（方便品　八十二頁 四行）

○「習学」の３つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』　（法師品　二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』　（『新釈法華三部経　第一巻』　P8・8行／P5・1行）

※表記　例：(P353・1行／P259・7行)　⟹　（『新釈・文庫版』頁数／『新釈・単行本』頁数）

◇　◇　◇

≪如来寿量品（後半）のあらすじ≫

── 自我偈 ──

【二七九頁 五行】世尊はこれまで説いてきた無生無滅の**『仏の本体』**の意味と、なぜ自分が**『入滅をしなければならないのか』**の理由をさらに述べるために、『偈・げ』を用いて説かれました。

【仏の存在が≪久遠実成≫であり、常に衆生を教化し続けている】　──

【(偈)二七九頁 七行】／【経典 十六頁 一行】（『我佛を得てより來（このかた）經（へ）たる所の諸（もろもろ）の劫數（こっしゅ）無量百千萬億載阿僧祇（おくさい あそうぎ）なり』）「私が仏の悟りを得てから今日（こんにち）までの期間は、無量百千万億載阿僧祇（さいあそうぎ）という無数の劫（こう）を重ねた永遠の年月を経（へ）ています。私は、片時（かたとき）も休むことなく、**『常に』**真実の教えを説き続け、無数億（むしゅおく）という無数の衆生を教化してきているのです。

【(偈)二七九頁 終四行】／【経典 十六頁 三行】（『衆生を度せんが爲の故に 方便して涅槃を現ず 而（しか）も實（じつ）に

は滅度せず 常に此（ここ）に住して法を説く』）「私は衆生を**『真の救い』**へと導くため、**『方便』**として**『滅度する』**という手段を用いてきましたが、しかし実際には、私はこの世から去ったのではありません。**私は常にこの娑婆世界に住して、皆さんに『法を説いて教化している』**のです。いつも皆さんのそばで私は**『神通力』**を自由自在に駆使（くし）して導いているのです」

【≪滅度≫を示す理由】 ――

【(偈)二七九頁 終二行】/【経典 十六頁 終行】（『顚倒（てんどう）の衆生をして 近しと雖（いえど）も而（しか）も見ざらしむ』）「しかし、衆生は仏とは全く反対の見方・考え方を持つ顚倒（てんどう）の状態でいるために、近くにいる私のことが判らず、**『仏の存在』を知ることができません**。仏の姿が見えていないのです。ところが私の**『滅度』**を目（ま）の当たりにすると、人々は私の遺骨を祀（まつ）って供養するようになり、その時はじめて仏を心から慕（した）い求めるようになります。／（『咸（ことごと）く皆恋慕（みなれんぼ）を懐（いだ）いて 渇仰（かつごう）の心を生ず』）喉（のど）の渇（かわ）きで苦しむ者が水を求めるように、**『仏と、仏の教え』を心から求める**ようになるのです」

【仏が見える(仏が現われる) 四つの条件】 ――

【(偈)二八〇頁 一行】/【経典 十七頁 二行】「そして、教えを求めずにはいられなくなった衆生が、／（『❶衆生既（すで）に信伏し ❷質直にして意（こころ）柔輭（にゅうなん）に ❸一心に佛を見たてまつらんと欲して ❹自ら身命（しんみょう）を惜まず 時に我及び衆僧（しゅそう） 俱（とも）に靈鷲山（りょうじゅせん）に出（い）ず』）**❶仏の教えを求道(ぐどう)して深く信受(しんじゅ)し、❷正直で素直で、とらわれのない心でいて、❸心の底から仏を求め、仏と共にあることを自覚し、しかも、自分も仏のように成りたいと心から願い、❹そのためには自分の命さえもいらないという真剣な心、小さな自我にとらわれない心境になったならば、☆その時、私は眷属(けんぞく／弟子、家来の意味)を引き連れて、霊鷲山・娑婆世界に姿を現わします。つまり皆さんの前に『現われる』**のです」

【仏が≪滅度≫を示す理由を、再び説く】 ――

【(偈)二八〇頁 三行】/【経典 十七頁 五行】「そして私は皆さんに次のように語ります。／（『常に此（ここ）にあって滅せず 方便力を以ての故に 滅不滅ありと現ず』）『**私はいつも皆さんのそばにいる**のであって、入滅してこの世を去ってはいません。それは、**皆さんを教化する方便として、姿を消し、この世を去る**という形をとるのです。そして再び身を現わすのです。／（『餘國（よこく）に衆生の 恭敬（くぎょう）し信樂（しんぎょう）する者あれば 我復（われまた）彼（か）の中に於て 爲に無上の法を説く～ 但（ただ）我（われ）滅度すと謂（おも）えり』）また娑婆世界以外の他の世界で、私を心から求める者がいるならば、私はそこにも現われて最高無上の法を説くのです』と語ります。しかし衆生はこのことが理解できないために、仏は**『滅度した』、『この世から去ってしまった』**と思っているのです」

【(偈)二八〇頁 五行】/【経典 十八頁 二行】（『我諸（われもろもろ）の衆生を見れば 苦海（くかい）に没在（もつざい）せり』）「仏の眼を以って衆生を見ると、衆生は**『苦しみの海』に溺(おぼ)れて喘(あえ)いでいる**ように見えます。そういう衆生を救うために私は**『滅度』**の形をとり、人々に仏の存在と仏の教えを**『求める心』**を起こさせ、教えを受け止めることができるように導くのです。私の**神通力**とは以上のようなものであって、／（『阿僧祇劫（あそうぎこう）に於て 常に靈鷲山（りょうじゅせん） 及び餘（よ）の諸（も

ろもろ）の住處（じゅうしょ）にあり』）私は**阿僧祇劫**(あそうぎこう)**という長い間、常に霊鷲山・娑婆世界、つまり皆さんのそばと、その他の世界の人々のそばにいて法を説き続けている**のです」

【仏の教えによって娑婆世界は≪天人常住満≫し、安らかな世界になるにもかかわらず、衆生はこの娑婆世界を、『苦の世界』だと見る】 ――

【(偈)二八〇頁 終五行】／【経典 十八頁 終二行】（『衆生劫盡（こうっ）きて 大火に焼かるると見る時も 我が此の土は安穏にして 天人常に充満せり』）「**衆生が現実の世を見ると、すでに終わりを告げ、苦しみの業火**(ごうか／**地獄の炎**)**に焼き尽くされ、苦しい人生を送る世界のように見えます。つまり、『苦の人生』**だと感じています。しかし、**私の教えに導かれれば、この娑婆世界は仏の世界になり、天人が常に充満する安らかな世界になる**のです。**この仏の世界は安らかで穏**(おだ)**やかです。安穏**(あんのん)**で**、美しい林や花園に包まれ、素晴らしい家、屋敷が設（しつら）えられ、多くの宝が実る宝樹（ほうじゅ）が連（つら）なり、豊かな果実がたわわに実（みの）った満ち足りた世界で、人々は何の心配もなく楽しく生活している世界です。そして天人が天界の清らかな音色（ねいろ）の太鼓を打ち鳴らし、妙（たえ）なる音楽を奏（かな）で、／（『曼陀羅華（まんだらけ）を雨（ふ）らして 佛及び大衆に散ず』）美しい曼陀羅華（まんだらけ）の花びらが**仏と人々に等しく雨のように降り注がれます**。仏の世界とは**仏と衆生が一体**となり、得（え）も言われぬ**美しい平和な世界**なのです」

【(偈)二八〇頁 終行】／【経典十九頁 四行】（『我が浄土は毀（やぶ）れざるに 而（しか）も衆（しゅ）は焼け盡（つ）きて 憂怖（うふ）諸（もろもろ）の苦惱（くのう） 是（かく）の如き悉（ことごと）く充満せりと見る』）「このように**仏の眼から見た現実の世界は、じつは毀**(こわ)**れも焼けもしない**のですが、残念なことに衆生の目から見る現実の世界は、大火に焼き尽くされ、**不足と不満、不安と恐怖、怒**(いか)**りと争い、憂**(うれ)**いと悲しみに満ちて、すべてが苦しみ、悲しみ、悩みでいっぱいになっている『苦の世界』だと見える**のです。／（『是（こ）の諸（もろもろ）の罪（つみ）の衆生は 悪業の因縁を以て 阿僧祇劫（あそうぎこう）を過ぐれども 三寶（さんぼう）の名（みな）を聞かず』）そして衆生は智慧がないために善い行ないができず、その結果、悪い行ないを積み重ねてしまい、そのために阿僧祇劫（あそうぎこう）という計り知れない年月を過ぎても、**仏・法・僧**の、『**三宝**・さんぼう』の縁に触れることができず、その名さえ耳にすることができません」

【『仏を見る』ことができる条件を、あらためて説く】 ――

【(偈)二八一頁 三行】／【経典 十九頁 終行】（『❶諸（もろもろ）の有（あら）ゆる功徳を修し ❷柔和質直（にゅうわしちじき）なる者は 則（すなわ）ち皆我（みな わ）が身 此（ここ）にあって法を説くと見る』）「しかし、❶世のため人のためになる様々な**善い行ないを実践し、❷とらわれのない柔和**(にゅうわ)**な心で、正直で素直な心**で精進している者は、すぐに**私を見ることができ、仏が常に自分のそばにいて法を説いてることを自覚する**のです。そのような人々に対して、／（『或時（あるとき）は此の衆の爲（ため）に 佛壽（ぶつじゅ）無量なりと説く 久しくあって乃（いま）し佛を見たてまつる者には 爲（ため）に佛には値（あ）い難（がた）しと説く』）仏はある時、**『仏の寿命は無量である』**と説くことがあります。また、長い間、仏を見ることができなかったにもかかわらずようやく**『仏の存在』**を知り、**『仏を見る』**ことができた人には、『**仏に出遭**(であ)**うことは大変難しい**ことなのです。ですから、仏の存在を知り、仏を見ることができたのですから、一生懸命精進しなさい』と説くのです」

【仏の寿命が無量であることの理由】 ――

【(偈)二八一頁 六行】／【経典 二〇頁 四行】（『我が智力（ちりき）是（かく）の如し 慧光（えこう）照らすこと無量に 寿命無数劫（むしゅこう） 久しく業（ごう）を修（しゅ）して得（う）る所なり』）「仏の智慧の力というものは以上のように大きいものです。その**智慧の力が照らし出す世界は無数**に及びます。また**私の寿命というものも無量**であり、それは**長い間に善業を積んできた菩薩行実践の功徳**にほかなりません」

【仏の言葉を疑ってはならない。仏の言葉はすべてが『真実』であるから】 ――

【(偈)二八一頁 終六行】／【経典 二〇頁 終二行】「皆さんは仏の智慧を具（そな）えているのですから、／（『此（こ）に於て疑（うたがい）を生ずることなかれ 當（まさ）に斷（だん）じて永く盡（つ）きしむべし 佛語は實（じつ）にして虚（むな）しからず』）以上の『仏の真実』について疑いの心を持ってはなりません。疑いと迷いは永遠に断ち切ってください。なぜなら、**仏の言葉は全てが真実であり、偽(いつわ)りはない**からです」

【仏が≪滅度≫を示す理由を、三度(みたび)説く】 ――

【(偈)二八一頁 終五行】／【経典 二一頁 一行】「先の**『良医治子・ろういじ の譬え』**のように正気を失った子どもたちに対して、父が方便を用いて実際には死んではいないのに、『死んだ』と告げたことを、嘘（うそ）を言ったとして咎（とが）めることはできません。**仏の『滅度』**は人を騙（だま）す虚妄（こもう・人をだますこと）ではないのです。／（『我も亦（また）爲（こ）れ世の父 諸（もろもろ）の苦患（くげん）を救う者なり』）**私は皆さんの父です。この娑婆世界全体の父であります。あらゆる悩み苦しみを救う人なのです。私はいつも皆さんのそばにいて**苦しみを除こうとしているのですが、凡夫は煩悩にとらわれて正気を失い、智慧ある見方とは全く逆転して心が顚倒（てんどう）しているために、真実を見ることができていません。／（『實（じつ）には在（あ）れども而（しか）も滅すと言う』）ですから**私は、実際にはいつも皆さんのそばにいる**のですけれども、時が来れば『仏の存在と教え』を求める心を人々に起こさせるために、**『滅度する』**と告げるのです」

【(偈)二八一頁 終二行】／【経典 二一頁 五行】（『常に我を見るを以ての故（ゆえ）に 而（しか）も憍恣（きょうし）の心を生じ 放逸（ほういつ）にして五欲に著（じゃく）し 悪道の中に墮（お）ちなん』）「もし、いつでも仏に会うことができるのだということになれば、人々は仏の縁に触れることが貴重なことだとは思わず、そのため、仏の教えを求めることもなく、その結果、わがままな心を起こしてしまい、欲しいままに五欲にとらわれ、やりたい放題になって、結局は行き着くところ、**地獄・餓鬼・畜生・修羅**という**『四悪趣(しあくしゅ)』**の**悪道の人生に転がり落ちて行く**ことになります」

【仏は常に衆生と共にいる。一切衆生をその者に合わせて適切に教化している】 ――

【(偈)二八二頁 一行】／【経典 二一頁 終行】（『我常に衆生の 道（どう）を行じ道を行ぜざるを知って』）「私は、皆さん一人ひとりの精進の状況・程度というものを**常に見抜いています**。つまりこの人は仏道をどこまで実践していて、どこまで極めているか。反対にこの人は何が実践できていないでいるのかという状況をつまびらかに見極めています。／（『度すべき所に隨（したが）って 爲に種々の法を説く』）ですから、**その人の状況・機根を見抜き、最も的確な現象を示して、最適な教化をする**のです。つまりその人に相応（ふさわ）しく教化するための現象を示します」

【(偈)二八二頁 二行】/【経典 二二頁 一行】（『毎（つね）に自ら是（こ）の念を作（な）す 何を以てか衆生をして 無上道に入（い）り 速（すみや）かに佛身を成就することを得せしめんと』）「**私はいつも思っています**。『どのようにしたら、衆生が仏の道に入ることができるであろうか。そしてどのようにしたら、いち早く**仏の境地**に到達させることができるだろうか』と**常にそれだけを念じ、願っている**のです」

釈尊は、仏の深い**『大慈悲』**と一切衆生を救い切るという**『仏の本願』**である**【一大真実】**を説き明かされたのでした。

◇　◇　◇

現象（げんしょう）を実在（じつざい）と見（み）る誤（あやま）り

(P193・4行／P139・4行)

凡夫というものは様々な欠点を持っていますが、なかでも**最大の欠点**は**「目に見えるものしか実在しないと思うこと」です。この誤りから全ての誤りが出発し、全ての不幸が展開していくのです。**
～ まわりに起こる色々な物事を、確かに実在するものだと見るために、それに心をふりまわされて苦しむのです。

それで、仏さまは、この世のすべての現象は**『因(ある原因)と縁(ある条件)**が結ばれて生じた**仮のあらわれにすぎない』**ことを教えられました。

《思惟（しゆい）のひととき　①》

「凡夫の**最大の欠点は『目に見えるものしか実在しないと思うこと』です。この誤りから、全ての誤りが出発し、全ての不幸が展開していくのです**」と庭野開祖は説きます。
　― では、この「眼に見えるものしか実在しない」と思う「誤り」から脱するには、「どのようにすればよい」のでしょうか？　また、「どのような心構え」を持つことが大切なのでしょうか？　考えてみましょう。

※ 誰もが**「縁起」**によって如何（いか）ようにも変わってしまう という**『平等相』**を持っている。**この世のすべての物事は、「縁起の法則」に従って存在している。**

なぜ良薬（りょうやく）を飲（の）まないか

P197・1行／P141・終5行)

（あさはかな人間のわがままです。まだ知恵のできあがっていない子どもが、父の厳しい教えを嫌がるのと同じです）

五官の楽しみに溺（おぼ）れている人間にとって、仏さまの戒めや教訓は窮屈（きゅうくつ）でたまらなく感じられ～　人のために尽くす**菩薩行などバカバカしい**としか考えられないからです。
～ そういう衆生に対して、**仏さまは怒(おこ)りもされなければ、あきらめもされません。『此の子愍（あわれ）むべし』**といっておられます。ここがありがたいところです。

《思惟のひととき　②》

「五官の楽しみに溺（おぼ）れる人間は、仏さまの戒めや教訓を窮屈（きゅうくつ）に感じ、菩薩行をバカバカしいと考える」「そういう衆生に対して仏さまは怒(おこ)りもされなければ、あきらめもされません。『此の子愍（あわれ）むべし』と言っておられます。ここが有り難いところです」と庭野開祖は示します。

――　では私は、「仏さまの教えや戒めを守ることを窮屈に感じ、菩薩行をバカバカしい」と思っていますか？　そして仏さまが『此の子愍むべし』と言っておられることを、どのように受け止めますか？　ふり返ってみましょう。

自行の必要

(P198・8行／P142・終4行)

人間にとって、自分自身でものごとをすることが、何より大切です。ことに信仰は絶対にそうでなくてはなりません。～　**あくまでも自分の心で真剣に道を求め、修行していかなければなりません。～　自分で求め、自分でつかんで行ってこそ、本当に身に付くのです。**

《思惟のひととき　③》

「(信仰は) **あくまでも自分の心で真剣に道を求め、修行していかなければなりません。自分で求め、自分でつかんで行ってこそ、本当に身に付くのです**」と庭野開祖は説きます。

――　では私は「自分の心で真剣に仏さまの教えを求め、自ら実践しているか？」　ふり返ってみましょう。

※「上求菩提・下化衆生」、「自行即化他」、「化他即自行」

『尋いで便ち來り帰って咸く之に見えしめんが如し』　(二七八頁　終行)

そして子どもたちが治ると、それを見計ったように父は他国から帰ってきて、子どもたちの前に**姿を見せた**のです。

『壽命無數劫久しく業を修して得る所なり』　(二八一頁　六行)

如来の寿命が無量である。つまり、如来として寿命が無量であるのは、それは、**長い間に善業を積んできた菩薩行実践の功徳にほかなりません**。

『我も亦爲れ世の父　諸の苦患を救う者なり～實には在れども而も滅すと言う』

(二八一頁　終三行)

※『【主】今此の三界は皆是れ我が有なり　【親】其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり　【師】而も今此の處は諸の患難多し　唯我一人のみ能く救護を爲す』(『譬諭品』一〇七頁　終五行)**【主・師・親(しゅ・し・しん)の三徳】**

ふたたび仏(ほとけ)を見(み)る

(P199・終5行／P143・8行)

子どもがすっかり治ってしまったら、父が無事な姿を見せて帰ってきたということ、これがまたひじょうに意味深い教えです。〜

我々が**仏の教えを心から信仰すれば、ひとりでに仏さまが見えてくるのです。**なにも、仏さまのお姿がみえてくるのではありません。**仏さまと共にあるということが、自覚されてくるのです。**〜

いったんは見失ったようでも、**その教えを正しく信受すれば、仏さまはその瞬間に我々のところへ帰ってこられるのです。そして、真の親としていつまでも一緒に暮らし、我々を守ってくださるのです。**この譬えには、このような、言うに言われぬ**『慈悲の心』が満ち溢れている**ことを、よく感じ取らなければならないと思います。

※**「見る**／自然とみえる。受動的にみる**」。「観る・視る**／意識してみる**」。「覧る**／よくみる**」。**

「診る／診察する。しらべる**」。「看る**／みまもる。世話をする**」。**

《思惟(しゆい)のひととき　④》

子どもたちが薬を飲んで病が治ってしまうと、父が無事な姿を見せたことの意味を、「仏さまのお姿が見えてくるのではありません。仏さまと共にあることが『自覚』されてくるのです」。しかも「教えを正しく信受すれば、仏さまはその瞬間に我々のところへ帰ってこられるのです」と庭野開祖は説きます。

――　このことを、あなたはどのように感じますか。

『顚倒(てんどう)の衆生(しゅじょう)をして近(ちか)しと雖(いえど)も而(しか)も見(み)ざらしむ』　(二七九頁　終二行)

《思惟(しゆい)のひととき　⑤》

『顚倒の衆生をして 近しと雖も而も見ざらしむ』／「顚倒している（何事も仏の見方とは反対に損得、好き嫌いなどで判断し、自分中心で見ている）**衆生は、本仏がいつもそばにいるのに、それを『見る』ことができない**」と釈尊は説いています。

――『仏を見ることができない』のは一体なぜなのでしょうか？　そして、そういう衆生が『仏を見る』、仏さまが『常にそばにいることを感じる』ためには、どうすれば良いのでしょうか？　考えてみましょう。

※『四顚倒・してんどう』

「常顚倒」・とらわれる。決めつける。人を許せない。咎める。責める。

「楽顚倒」・今さえ良ければと思う。目の前のことだけを考え、後のことを考えない。

「我顚倒」・有難う、ごめんなさい、お願いします、が言えない。自己中心。

「浄顚倒」・恥ること、敬うことを知らない。まっ、イイかと曖昧にする。大切に取り扱えない。

宗教の極致

(P207・3行／P149・終5行)

（自らのものの見方が）顚倒（てんどう）であるということだけでも、しっかりと悟っていれば、相変わらず「目に見えるもの」のみを対象としていても、**心は常に仏さまの方を向いています。**

ですから行住坐臥（ぎょうじゅうざが）、仏さまの教えに基づいた行ない、すなわち**菩薩行を自然とするようになるのです。そしてそれが完全にできるようになった時、はじめて人間の『仏性』が燦然(さんぜん)として輝き出してくる**のです。**これが、『宗教の極致』**といってもいいでしょう。

《思惟のひととき ⑥》

『❶衆生既に信伏し ❷質直にして意柔輭に ❸一心に佛を見たてまつらんと欲して ❹自ら身命を惜まず 時に我及び衆僧 倶に靈鷲山に出ず』の経文を、どのように受け止めますか？ この経文を味わってみましょう。

※ 『❶衆生既（すで）に信伏し ❷質直にして意（こころ）柔輭（にゅうなん）に ❸一心に佛を見たてまつらんと欲して
❹自ら身命を惜まず ⇨ 時に我及び衆僧（しゅそう）倶（とも）に靈鷲山に出（い）ず』

（『如来寿量品』二八〇頁 一行／『経典』一七頁 二行）

❶仏の教えを求道(ぐどう)して深く信受(しんじゅ)し、
❷正直で素直で、とらわれのない心でいて、
❸心の底から仏を求め、仏と共にあることを自覚し、しかも、自分も仏のように成りたいと心から願い、
❹そのためには自分の命さえもいらないという真剣な心、小さな自我にとらわれない心境になる。
今までの自分を捨てる。（わがままな自分をそうでなくする。怒りっぽい自分をそうでなくする）

☆**その時(❶～❹が整った時)** ⇨ **私(仏)は眷属(けんぞく・弟子、家来の意味)を引き連れて、霊鷲山・娑婆世界に姿を現わします。 つまり皆さんの前に『現われる』**のです」

『阿僧祇劫に於て常に霊鷲山及び餘の諸の住處にあり』 (二八〇頁 終五行)

『衆生劫盡きて大火に焼かるると見る時も我が此の土は安穏にして天人常に充満せり～曼陀羅華を雨らして佛及び大衆に散ず』 (二八〇頁 終五行)

衆生は、この世は時代が終わり、大火に焼き尽くされるように苦しむ世界、**『苦の世界』**だと見えるのですが、じつはこの世は仏の教えによって救われ、天人が充満して、～ そればかりか曼陀羅華（まんだらけ）の花びらが仏および衆生に平等に降（ふ）り注（そそ）がれている**『大安心の世界』**なのです。

『我が浄土は毀れざるに而も衆は焼け盡きて憂怖諸の苦悩是の如き悉く充満せりと見る』　(二八〇頁　終行)

仏さまの目から見れば、この娑婆世界は仏の国土であるのにもかかわらず、自分の仏性をあらわすことができずに(**『正しいことに気づく』にとができず**)、迷いが覆(おお)い、仏性を隠(かく)している(**『自分中心の考え』しかもたない**)衆生から見ると、この世は、まさしく地獄の様相(ようそう)に見える(**『不満に満ち、苦しみが後から後から襲ってくる世界』だ**)というのです。

『諸の有ゆる功徳を修し柔和質直なる者は則ち皆我が身此にあって法を説くと見る』　(二八一頁　三行)

世のため、人のためになる精進を修め、功徳を積み、心が柔和で正直で素直な人は、すぐに**私(仏)を見ることができる**のです。

『佛語は實にして虚しからず』　(二八一頁　終五行)

『我も亦爲れ世の父諸の苦患を救う者なり凡夫の顚倒せるを爲て實には在れども而も滅すと言う』(二八一頁　終三行)

私は娑婆世界全体の父であり、あらゆる悩み苦しみを救う者です。私はいつも苦しみを除こうとしているのですが、凡夫は煩悩にとらわれて正気を失い、心が顚倒(てんどう)しているために真実を見ることができていません。**私は、実際にはいつも皆さんのそばにいる**のですけれども、『仏の存在と教え』を求める心を人々に起こさせるために、**『滅度する』**と告げるのです

『我常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知って度すべき所に隨って爲に種種の法を説く』　(二八二頁　一行)

私は、皆さん一人ひとりの精進の状況・程度というものを常に見抜いています。つまりその者は何を実践しているのか、反対に何が実践できていないでいるのかということをつまびらかに知っています。ですから私は、**その人の状況・機根・精進具合に応じて、いち早く悟ることができるように、最も的確な現象を示して教化をする**のです。つまりその人に最も相応(ふさわ)しい**現象を示して教化をするのです。**

『毎に自ら是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入り速かに佛身を成就することを得せしめんと』　（二八二頁　二行）

この結びのお言葉こそ、仏さまの**慈悲の極致**であります。単にその場その場の苦しみを救おうというのではなく、こういう**本質的な救いを実現しよう(無上道に導き入れる)**というのが、仏さまの本願なのであります。

《思惟のひととき　⑦》

『毎に自ら是の念を作す 何を以てか衆生をして 速かに佛身を成就することを得せしめんと』の経文をあなたはどのように受け止めますか？　味わってみて下さい。

如来寿量品は法華経の精髄

P232・3行／P169・終2行）

如来寿量品によって、我々が知ることができたのは――

第一に、仏さまの本体は「**久遠実成の本仏**（宇宙の大生命）」であり、**常にこの世に住していらっしゃる**こと。

第二に、本仏は、**我々といついかなる時でも共にいてくださり、常に我々を生かしてくださっている。**

第三に、もともと仏と衆生は親子なのだから、**我々もまた、「永遠に生き通し」**なのである。

以上のことを自覚し、しっかりと胸のなかに確立すれば、**我々の人生は実に明るい、不安のない、しかも勇気と積極性に溢れるものとなる**のです。

『如来寿量品』が**『法華経』の精髄**であり、**一切経の魂**であるとされているゆえんは、ここのところにあるのです。

《思惟のふりかえり　まとめ》

今日の『如来寿量品 第十六（後半）』の学びを通して、何を学び取ったか？ （または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）　振り返ってみましょう。

合　掌